

風

F U U



人間が

大事にされあう風を

啓成校区に！

平成27年3月発行

啓成校区人権・同和教育推進協議会

生きる権利について

啓成校区人権・同和教育推進協議会

会長 武 永 健 一

最近の報道に接する中で、人の命を軽んじるような犯罪行為が目立つ気がします。国内では、『人を殺してみたかった』との理由で大人の女性の殺人に及んだ女子大生の事件がありました。また、十歳前後の男児や女児を殺害した事件もありました。被害に会った人たちは普通に明日も元気で暮らそうと考えていたでしょう。

また、国外では、日本人を含む何人もの人質が殺害されるという残酷な行為を全世界の人々が目の当たりにしました。さらに、中東の地では学校を武装グループが襲撃し女生徒二百数十人を誘拐し酷い仕打ちを加えているとの情報も伝わってきています。

特に、日本人の人質だった後藤健二さん自らの動画が何回も放送されましたが、その中で『私は必ず無事に戻るつもりですが、そのね。』と話しておられました。ご家族は無事の帰国を祈るような気持ちで待っておられたことでしょう。

そういった犯罪行為に対して具体的に何の対応もできない家族の苦悩、くやしき、無念さを思うと言葉がありません。

そもそも宗教というのは(いかなる宗教であつても)人々の魂の救済であつたり、やすらぎや納得の提供であると思えます。現在イス

ラム国を名乗る過激派集団の動きがしきりに報道されていますが、人の生きる権利や自由を強引に奪う行為は決して許されるものではありません。彼らは宗教に名を借りた、権力欲・名声欲・金銭欲に満ちた単なるならずもの集団にすぎません。

そんな中、昨年の十月十一日の報道によると、今回のノーベル平和賞の対象者としてイスラム武装勢力のタリバンに襲撃され重傷を負いながらも女性や子どもに教育機会を与える必要性を訴え続けるマララ・ユスフザイさん(十七歳、パキスタン)と、インドで貧しい子どもや若者に教育機会を作る活動を続けるカイラシユ・サテイヤルティさん(六十歳)の二人が選ばれました。このことは、現在世界中で弱い立場の人々にもっとみんなが目を向けていこうという重要で意義のあるメッセージだと思えます。

わたしたちそれぞれが毎日の生活の中で、地道にできることを心がけながら、ふだんの挨拶、さりげない譲り合い、温かい言葉かけ等を通して、少しでも安心できる、住みやすい街づくりをしていけたらと思います。

人は人生の中で、楽しい事ばかりではなくても最後まで生きる権利があります。

